

「書道」に関する用語の 適切な英語翻訳についての研究

—「篆刻」に関する用語について—

神 野 雄 二

A study of appropriate English translations for *Shodo* terminology:

—With special reference to terminology for “seal-engraving”—

Yuji JINNO

(Received January 31, 2018)

1. はじめに

これまで篆刻に関する論文を執筆し、そのタイトルの表記や、専門用語を英語に翻訳するにあたって、適切な英語翻訳がなされているか戸惑うことがある。本稿では、篆刻に関する用語を取り上げて、それが英語でどのように翻訳されているか、数種の文献・資料にあたりその在り方に関して考察するものである。

また、諸外国に紹介された篆刻に関する紹介文を翻訳し、今後の英語における書道用語の翻訳のよりよい在り方を検討する。本稿では取り上げなかったが、これまで書道や篆刻を海外へ紹介した先人や文献・資料の研究は、興味あるテーマと言える¹ (図1～2)。更に、中国語での篆刻の諸文献・資料がどのように英訳されているかも併せて検討したい。

2. 「篆刻」に関する用語の定義

まず、「篆刻」の日本語における定義を、書道の専門書からみておきたい。

(1) 小松茂美編『日本書道辞典』(二玄社、1987・12)において、次のように定義する。

てんこく【篆刻】石、木、牙、角、銅などの印材いんざいに、篆書体を用いて*印いんを刻すこと。広義には、*鑄印ちゅういん、陶印などを含め、書体も*篆書てんしよに限らない。篆刻の語は中国の明代より始まり、当時の文人達が石印材に自書・自刻するようになって、篆刻は文人の必須条件として重んぜられ、芸術としての地位を獲得した。日本で文人達が自ら印を刻すようになったのは、江戸初期に中国から禅僧の*独立どくりゆう性しやう易えき、*心越しんえつ興こう儻ちやうが渡来して、明末清初の印風を伝えてからのことである。榊原篁洲さかきばらこうしゆう、*細井広沢ほそいこうたくらがその先駆けとなり、篆書の字書も刊行されて、次第に流行した。中期に*高芙蓉かうふようが出て復古を提唱し、秦漢古銅印を基調とする高雅な作風を展開、以後、明治の初めまでその風が行なわれた。明治以降、清末から民国の新しい刻風や金石学を学んで一家を成した人々に、篠田芥津しのだかいしん、*中井敬所なかいけいしよ、*中村蘭台なかむららんたい、*河井基廬かわいせんろらがあり、近代篆刻への道を開いた。

(木下政雄)

(2) 北川博邦氏は、「篆刻の名義」(『季刊篆刻』² 第一輯、日本篆刻社、1983・4)において、次のように定義する。

刻印の一道を指して「篆刻」と称するは、漢の揚雄の「法言」に、「童子なりしとき雕蟲篆刻せり」とあるのが出典され、異詞はないようであるが、果してそうであろうか。また「篆刻」の語が刻印の意味で用いられるようになったのは、いつの頃からであったろうか、今そのことについて少し考えてみたい。

「篆刻」という語の名義について論じたものは甚だ少なく、管見に入ったものは僅に「金石篆刻研究」(香港商務印書館刊、撰者未詳)の第一編第一章に「篆刻之釋名及意義」と題した一篇あるのみである。(中略)

「篆刻」の語の初見は揚雄の「法言」にあるが、これが治印をいうものではなく、篆字の義を推し、篆刻の語の意味を雕琢とし、治印のみならず、字たると畫たると文様たるとを問わず、すべて金・玉・木・石・骨角等に刻したものは篆刻であるとしている。(中略)

「篆刻」の語が治印一道の名称として用いられた例は、宋元以前はもとより、明初にも見られない。それはおそらく文彭・何震等の治印の名家が輩出し、治印一道が芸苑の一角に確固たる地歩を築き、文人の清玩に供せられるようになった明末から急速に広まったものであろう。明史文苑伝に、「文彭・文嘉、並びに篆刻を工にす」とか、治印の專著に、袁三俊の「篆刻十三略」があるなど、その例は枚挙する暇が無いほどである。

治印一道が「篆刻」と称せられたのは、ただ篆書を刻したが故に過ぎない。印章は元來篆書を刻することが正格であるから、後には篆の一字は印の意味をももつに至った。握篆・撰篆などの語はその一例である。すなわち、篆刻はまた印刻でもあ

る。(中略)

しからは、治印の意味の篆刻の語の出典は何処に求めたらよいであろうか。上述の如く治印を篆刻と称することは、それが、ただ篆書を刻したものであるという理由によるに過ぎないので、殊更にその出典を求める必要もないのだが、うまい具合にこれに擬すべき恰好のものがある。元史成宗本紀に、「至元三十一年甲午夏四月壬午、御史中丞崔彧、玉璽を故臣の家に得たり。其の文に曰く、受命于天既壽永昌と、之を徽仁裕聖皇后に上る。是に至りて手づから帝に授く」とある。この傳國璽の真偽は、今ここでは問題ではない。陶宗儀の輟耕録に、この崔彧の進璽の奏を引き、「楚の卞和の獻ずる所の璞、琢して璧と成す。後ち婚を趙に求め、以て聘を收む。秦の昭王、請ふに十五城を以て之に易へんとせしも獲ざりき。始皇、六國を併せて之を得、李斯に命じて其の文を篆し、玉工孫壽をしてこれを刻せしむ」とある。治印の意味の篆刻の本義は、「篆してこれを刻す」ということであるから、これこそ、その出典として最適のものである。またその実否はともかくとして、孫壽こそは、印章の刻者として今日に名を留めた最初の人であるのだから尚更のことである。筆匠に於ける蒙恬の如く、李斯・孫壽の二人は、篆刻家は宜しく奉崇して篆刻の始祖とすべきであろう。本稿は、雑誌『書品』第226号に掲載した同題の拙稿を一部補訂したものである。

(3) 中西慶爾著『中国書道辞典』(木耳社、1981・1)において、次のように定義する。

てんこく《篆刻》

印を大別すると、鑿印(鑿印も含めて)と刻印の二種となる。篆刻とは主に後者のことで、文字通り篆を刻することで、もっぱら「刻」に比重をおく。前者については先に「印章」の項で略述した。

[篆刻の始源] 明の会稽の王冕が青田花乳石を用いてはじめて石に篆を刻し、つづいて明の文彭が橙光凍石を掲げて出現したというあたりが始源であろう。『明史』文苑伝に「文彭・文嘉⁴竝工於篆刻」と見えるのが篆刻の語の初見である。印章の製作者を印人といい、その印人の名を具体的に示して芸術としての一分野を獲得した時期がその始源である。

いんしょう《印章》

木あるいは金石に文字を鑄刻して、証信とするもの。『漢書』に「使_三各佩_二其信印_一、廼可_レ使_レ通_二言于神人_一、」とある。印は作ること、章はその文字である。

[印章の起源] 物象を金石などに鑄刻して、これを他物に押すことは、紀元三五〇〇年前からメソポタミアなどで行なわれたといわれる。それが印度のモヘンジョダロやハラッパーの遺跡からも発掘されて、印章使用の習慣は西から東漸したもの

と考えられているが、この習俗がいつごろ中国に伝ったかは明らかでなく、殷・西周を通じて遺例はない。(伝殷墟出土三印というがあるが、論議が多い)東周前後とみることはたしかなようだ。

次に、篆刻の日本語における定義を一般の辞典からみておきたい。

(1) 新村出編『広辞苑』(岩波書店、2008・12)

てん・こく【篆刻】①木・石・金などに印をほること。その文字に多く篆書(ㇿ)を用いるからいう。「一家」②文章の修辭・虚飾が多くて実用の伴わないこと。

(2) 『日本大百科全書16』(小学館、1998・7)

篆刻 てんこく 書画の落款印など、実用以外の趣味的な印を彫ること。とくに職人に任せず、文人墨客が自分でやることをいう。

(3) 日本国語大辞典第2版編集委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第2版・第9巻。(小学館、2001・9)

てんこく【篆刻】〔名〕①木・石などの材料に、印として文字をほりつけること。印刻。多く、篆書体の文字が用いられたところからいう。*禅林象器箋(1741)叢軌「旧説曰、中華寺院有_二其寺印_一、如_二天童印_一、以_二玲瓏巖主四字_一篆刻」*二老略伝(1772)「篆刻をなす故に唐本の秋間戯鉄を翻刻せしめられたり」*福翁自伝(1899)〈福沢諭吉〉品行家風「画も出来、篆刻(テンコク)も出来る程の多芸な人に」*腕くらべ(1916-17)〈永井荷風〉一二「日頃道楽に習ひ覚えた篆刻をば、いつともなく専門の業とするやうになり」*明史-文苑伝「文彭〈略〉文嘉〈略〉、並能_レ詩工_二篆刻_一」②文章の一字一句を練り過ぎて、虚飾が多くて、実質のないこと。また、そのような文章。また、文章を作ることの謙称。*揚子法言-吾子「童子雕虫篆刻、壮夫不_レ為也」発音〈標ア〉㊦〈京ア〉㊦ 辞書へボン・言海 表記篆刻(へ・言)

(4) 『世界大百科事典 2009年改訂新版』(平凡社、2009・6)

てんこく 篆刻 zhuàn kè

広義には印材に文字を刻すことをいい、秦・漢以来、印文には多く篆書を用いるところから篆刻と称した。狭義には中国で元末に起こり明代に広まった、詩・書・画・篆刻と並称される文人四芸の一つで、多く書画などの雅事に用いる印章をみずから鉄筆(刀)を用いて主に蠟石(木、竹、陶土もある)に刻する石章篆刻をいう。

3. 「篆刻」の用語の英訳

辞典で「英語」がどのように訳されているかみてみる。

- (1) 『新和英中辞典』(Martin Collick, David P. Dutcher, 田辺宗一, 金子稔 編. 研究社. 2002・9)
seal-engraving
- (2) 斎藤秀三郎著 『NEW斎藤和英大辞典』(日本アソシエーツ辞書編集部編. 2002・12)
seal-engraving
- (3) 『JST科学技術用語日英対訳辞書』(科学技術振興機構)
seal engraving
- (4) 『日英対訳辞書』(情報通信研究機構)
stippling
- (5) 『weblio 英和対訳辞書』(weblioのデータベース)
Seal carving
- (6) 『ジーニアス英和大辞典』(小西友七・南出康世編集主幹. 大修館書店. 2001・4)
Seal

*seal' / si:l/ 『初13c: ラテン語 sigillum (小さなしるし)』—— I (所有権や出所の正しさを示すため, ろうなどに押される) 印, 印章, 紋章; 印鑑, 判, 璽(レ) 《◆欧米ではとかしたろうや鉛(→3)の上に印鑑を押して公文書などに添えるが, 日常は署名ですませ印鑑はほとんど用いない》; 印章つき指輪, 印形 || The contract bears the official ~. その契約書には公印が押してある / the Great S ~ of Japan 日本の国璽(レ) / Put your ~ to the right of your name. あなたの名の右側に印鑑を押さない. 2 封印, 封緘(レ), 封 || The ~ of the letter addressed to me is broken. 私宛ての手紙の封が破られている / lick the ~ on an envelope なめて封筒に封をする.

4. 英語で紹介された篆刻に関わる資料・文献の翻訳

これまで英語で紹介された篆刻に関わる資料・文献を翻訳する。紙幅の関係で要約したものがある。

- (1) 『英文日本大事典—カラーペディア / Japan: An Illustrated Encyclopedia』³
(講談社, 1993・11) (図3)

【英文①】

tenkoku 篆刻

(seal carving). Craving of a name or sobriquet in a durable material, such as stone or wood, to fashion a seal. *Tenkoku* (Ch: *zhuanke* or *chuan-k'ō*) refers to the carving of seals used in an unofficial capacity to imprint works of graphic art, and in particular to seals carved for their own use by *bunjin* (Ch: *wenren* or *wen-jen*; literati artists; see BUNJINGA). The term derives from *tensho* (Ch: *zhuanshu* or *chuan-shu*; archaic script), the calligraphic style in which seals are usually carved. Seal carving came to Japan from China in the Kamakura period (1185-1333) but did not flourish until the Edo period (1600-1868), when the practice spread among *bunjin*. Carving of seals and the study of old imprints continues today, and exhibitions are well attended by aficionados. See also RAKKAN.

【和訳① (要約)】

tenkoku (篆刻)

印を形造るために、名前や異名を石や木といった耐久性のある素材に彫ること。

篆刻は生き生きとした芸術作品に押すために、非公式の範囲の中で使われる印を彫ることに関係しており、特に文人たちによって自分たちの使用目的のために彫られた印である。

この言葉は、印が頻繁に刻まれる書体である篆書に由来する。篆刻は鎌倉時代に中国から日本に伝来したが、その慣習が文人たちの中で広まった江戸時代までは栄えることはなかった。

印を彫ることや古い刻印に関する研究は今日も続いており、展示会は愛好家によってよく訪れられている。

【英文②】

Seal Carving

The seals that calligraphers and artists use to sign their works feature archaic forms of Chinese characters. In the modern era, renewed contact between Japan and China exposed Japanese calligraphers to examples of early Chinese writing that sparked renewed Japanese interest in carving seals. Nakamura Rantai I and Kawai Senro, for example, went to China and collected innovative seals from the late Qing dynasty (1644-1912) that bore the influences of archaic characters; their own works subsequently infused new energy into the genre. Kawai, whose seals display both scholarship and exquisite craftsmanship, exerted a strong influence over seal carvers and calligraphers like Nishikawa Yasushi. The following generation of carvers was led by a Kawai disciple, Yamada Shōhei, and Nakamura Rantai II, among others.

Kawai Senro's Work reflects his deep knowledge of calligraphy. At far left, the simplicity and sharpness of line displayed in an early-1930s work convey the clarity of Kawai's vision. 1.6×1.6 cm. Skillful carving accentuates the inherent interest of the letter forms in the seal impression at left by Yamada Shōhei. 1960. 3.4×3.4 cm.

【和訳②】

篆刻

書家とアーティストが彼らの作品に署名するために使う篆刻は、漢字の古い形を特徴としています。

現代に入り、日中の関係が回復したことによって、日本人の書家達は、篆刻への日本人の関心呼び起こす早期の中国の書体の例に触れることとなりました。例えば、中村蘭台一世と河井荃廬は、中国へ行き、後期清王朝（1644-1912）から、古い文字の影響を伝える革新的な印を集めました。彼らは後に作品を通して新たなエネルギーをその分野に注ぎました。

学問と洗練された技巧を表す河井の篆刻は、篆刻家や西川寧のような書家に強い影響を及ぼしました。篆刻家の次世代は、河井の弟子・山田正平・そして中村蘭台二世その他の者たちによって導かれてきました。河井荃廬の作品は、彼の書道の深い知識を反映しています。左奥の作品は、1930年代前半の作品で、表現された線の単純さと鋭さは、河井の展望の明解さを表しています。（1.6×1.6 cm.）

熟練した篆刻は、山田正平による左の篆刻の表現にある文字の形の本来の関心を強めています。（1960. 3.4×3.4 cm.）

(2) NA Chih-liang

『THE PANORAMIC VIEW OF CHINESE SEAL DEVELOPMENT』 (CHINA CULTURAL ENTERPRISES, LTD. 1972 · 5) (图 4)

【英文】

THE STORY OF CHINESE SEALS

I THE ORIGIN OF SEALS

In China, long before paper was invented, documents, letters, and records were written on bamboo strips. These were made by splitting the bamboo about one inch wide, cutting off the joints at both ends, and then grinding the surface smooth. Because not many words could be written on a single strip, it usually required two, three, or possibly more than ten pieces to complete a sentence. To keep them in order, the set was strung together like modern bamboo window blinds. Each set thus strung, was called a book 册, and this Chinese character comes from the hieroglyphic symbol 册 actually a conventionalized picture of a set of strung strips.

If the contents of a book needed to be kept secret, it was rolled up. After a title strip was placed on the outside, the roll was tied with a cord. A ball of clay was placed over the cord and was pressed with the imprint of a seal. Sealing the bamboo book was called clay sealing. This method is comparable to today's lacquer or wax sealing. In those days, only clay was available. This was the origin of seals in China.

With the invention of paper in China, approximately 2000 years ago, people no longer wrote on bamboo strips. Instead, letters and records were kept on paper which was much more convenient for both handling and filing. Consequently, clay sealing, no longer having a practical purpose, became obsolete. *Water sealing* replaced it and colour was introduced. Colour, obtained by mixing cinnabar and water, was applied on the seal, then pressed on the paper. This impression was called water sealing, a process which constituted an important change in the history of seals.

Later, honey, instead of water, was mixed with cinnabar. The method, however, was the same as water sealing; that is, applying the mixed colour to the seal, then imprinting it on the paper. This sealing was called *honey sealing*. Using honey or water, one very carefully applied the colour onto the seal. If too much colour was applied, or not done evenly, the print came out blurred. A vague impression could cause great inconvenience to the already complicated official and social life of the times.

The next improvement in colour-sealing was called *oil sealing*. People mixed moxa punk and oil with vermilion powder. One simply dipped the seal in the colour and pressed it on the paper. It was not only more convenient but the resultant imprint came out very clearly. With the invention of oil sealing, very few people continued to use honey sealing or water sealing.

The favourite color for sealing was vermilion. Papers were written in black India ink, and a red seal placed on black figures would never spoil them. Such colours as black, blue, and violet were used for special occasions.

From the Tang Dynasty to the present time, oil sealing continued in use, and no change was made in the method of placing seals. On the other hand, the art of cutting seals and the technique of making the ink pad have been much improved.

【中文】

印章概說

(一)源流

在中國，紙沒有發明以前，所有書信與紀錄，都寫在竹簡或木簡上。竹簡比較容易做，只要把粗的竹子，截取一段，去掉兩端的節，然後順着竹紋，直着劈開，劈成大約一寸多寬，經過去皮與炙乾的手續，便可以使用了。爲什麼要去皮呢？如果不去皮，寫上的字容易被擦去；爲什麼要炙乾呢？不炙乾了它，很容易生蟲。以前的人，把這兩步手續叫做「殺青」與「汗簡」。汗簡的意思，是炙竹子的時候，水份由裏面冒出，好像人出汗一般。

一根簡上寫不了多少字，一根簡寫不完的話，記不完的事，就要分寫在兩根、三根，以至十數根簡上面去。簡多了容易錯亂，便把它們依次編織起來，編好了的東西，叫做「冊」，其實這個冊字就是繪了它的形，是個象形字。「冊」字的篆書作𠄎，甲骨文作𠄎，這個形狀與插圖一的圖，不是極相像嗎？凡是直線表示簡，橫線表示編織用的繩或皮條之類（見插圖一）。

每一冊編好之後，不能常久地平放在那裏，要把它捲起來，捲起之後，裏面是什麼看不到了，卷數多起來時，查找就非常麻煩，要在上面覆一個標籤，把內容記載在上面，這標籤叫做「檢」。然後用繩細起來。如果這個文件，是不要讓別人知道的，就在繩與冊相接的地方，放上一丸泥，用印章在泥丸上壓一下，泥被壓扁了，它也與繩子連在一起了，如果有人想要看看內容，就非毀掉了繩子或泥不可，這與現在用火漆封信的辦法是相似的。泥被壓扁之時，同時也在泥上現出印文，這塊有了印文的泥，叫做「封泥」，意思是說用泥把簡冊封起來了。這是印章的最早用途。

到了紙發明以後，人們不再用竹簡那種笨重東西了，把書信、紀錄都寫在紙上，收存傳

遞都便利多了，封泥の辦法，也就不適用了。於是廢泥不用，用水調和朱紅顏色，塗在印上然後印在紙上。這是印章用法的一個重大改變。用這種方法印出來的印文，叫做「水印」。

後來，有人用蜜調朱，不用水調，也照水印的辦法，塗在印上，然後印在紙上。這便叫做「蜜印」。

水印與蜜印，塗抹時要小心的塗，如果塗得太多，或是匆促地塗，都能使印文模糊，在事務日雜的情況下，顯得太不方便了。便有人發明了用艾絨和油，拌以珠砂，調成「印泥」，用的時候，只要把印章在印泥上蘸一蘸，就可以印到紙上，不但方便，而且清楚。印泥發明之後，用水印、蜜印的人就少了。

印泥的顏色，以朱紅色爲最普遍，因爲字用墨寫，顏色是黑的，紅色的印文，鈐蓋在黑色的字上，不致掩字，但也有用黑、用藍、用紫，或其他顏色的，那都不如紅色之多。

印泥發明之後，鈐印一直是使用印泥，印泥的製法，只有技術上的改進，基本方法，是沒有改變的。

【和訳（要約）】

印章の概説

（源流）

中国では、紙が発明されるずっと以前は、文書、手紙などの記録は竹簡や木簡に書かれました。

これらは幅約1寸の寸法で、竹を割ることによって作られました。そして、両端の節は切り取られ、滑らかな表面に磨かれました。多くの語を1つの小片に書くことができなかつたので、それは通常、文を完成させるために2・3またはおそらく10以上の小片が必要でした。それらを適切に使用するために、竹のジャバラのように繋ぎ合わせられました。このように紐をつけられた各々は「冊」と呼ばれていました。そして、この漢字は、実際に篆書体の「冊」から来ています。一組の紐をつけられた小片の実例に基づいた絵のようなものです。内容が秘密にしておかれる必要があるならば、それは紐で巻かれました。小片が外側に置かれたあと、全体は紐で結ばれました。

粘土の塊は、冊の上に置かれて、印章が押されました。竹簡に封を行い泥上の印文は、「封泥」と呼ばれました。この方法は、今日の封印に相当します。粘土を利用した「封泥」。これが中国の印章の起源といえます。

紙が発明されてからは、紙が使用され、封泥は廃止され、「水印」や「蜜印」が用いられました。後、「印泥」が用いられました。印泥は朱色が主ですが、黒・藍・紫などがあります。印泥が発明されてからは鈐印にそれが使用され、印泥の製法の技術は改進しましたが、印泥そのものに、大きい変化はありません。

- (3) Joseph S. P. Lo 『A COLLECTION OF SEALS IN THE MINQIU STUDIO』
羅善保編『敏求室藏印』（薰風堂筆墨有限公司出版部）（1994・2）（圖5）

【英文】

INTRODUCTION

The word 'seal' is quite simple and straightforward in English, but in Chinese the terminology is rather complicated. Before the Qin dynasty, (221 - 207 BC), the seal was called 'xi', but during the Qin dynasty only the emperor's seals were called 'xi', while the officials' or private seals were called 'yin'. The Tang dynasty empress Wu Ze Tian did not like the word 'xi' which was pronounced 'sei', because the sound was similar to the word 'si' meaning 'death', she, therefore, replaced it with a different word, 'bao' meaning 'treasure', and since then the seals of almost all the emperors have been called 'bao'. The seals of officials had different names, such as 'tu shu', 'ji', 'guan fang' etc, only the terms 'yin' and 'zhang' have survived throughout the dynasties and are still in use today.

The seal style of writing can be classified into two categories: Great Seal and Small Seal. Great Seal is a general term which includes the inscriptions on oracle bones, bronze and stone from the Shang dynasty (16th - 11th century BC) to the end of the Zhou dynasty (3rd century BC). Small Seal is a simplified and more uniform style of writing used during the Qin dynasty (221 - 207 BC). Although the seal scripts were replaced first by the clerical and subsequently by the regular script nearly two thousand years ago, they are still regarded as the standard writing in seal engraving. In order to acquire a feeling for linear design, the seal engraver, like the calligrapher, is free to adopt any ancient form of writing or alter the shape of the characters to fit his own design, hence the unlimited variations in the same character when carved by different artists.

【中文】

前 言

英文的“SEAL”一詞十分簡單易懂，可是在中文的術語裡它卻相當複雜。秦朝以前印稱作“璽”，到了秦朝只有帝王的印稱“璽”，其他的官印和私印稱為“印”或“章”。據說唐朝武則天不喜歡“璽”這個詞，因為在當時“璽”與“死”字讀音相近，所以改稱“璽”為“寶”。從那時以後，幾乎所有帝王的印都稱為“寶”，其他官印也有不同的名稱，如“圖書”、“記”、“關防”等，但都逐漸消聲匿跡，被時間淘汰，

只有“印”和“章”這兩個詞沿用至今。

一般來說，篆書可分成大篆與小篆兩類。大篆是一個通用的詞，它包括商周兩代的甲骨、鐘鼎、石鼓等文字，小篆乃是秦朝所用的一種統一而簡化的文字。雖然篆書逐步由隸書和楷書取而代之，但是篆刻家仍然認為它是鑄刻印章的標準文字。爲了得到線條與章法的美感，篆刻家正像書法家一樣地，可以採用任何古老的字體並且可以隨意改變字的結構。因此，同一個字在不同的篆刻家手下，刻出來的字形是千變萬化的。

【和訳（要約）】

序文

英文の『SEAL』という語は全く単純ですが、しかし、中国語において、用語はむしろ複雑になります。

秦王朝（221-207 BC）以前に、帝王の印は「璽」と呼ばれていました、しかし、その他の官印と私印は、「印」「章」と呼ばれました。唐代の武則天は「璽」を喜ばず、「璽」と「死」は音が近いので、「寶」に改称されました。帝王の印だけが、「寶」と呼ばれ、その他の官印は、「図書」・「記」・「関防」と呼ばれ、「印」と「章」のみが今日まで残されました。

一般に篆書は大篆と小篆の2種類に分類されます。大篆は、商・周時代の甲骨文・鐘鼎文・石鼓文の文字を指し、小篆は、秦朝の簡化された文字を指します。篆書は隸書へと変遷し、楷書へと移り変わりました。ただ篆刻家にとっては印章の標準文字は篆書体であり、美しいものです。字形は篆刻家により千変万化するものです。

(4) The Art of Japanese Calligraphy

by YUJIRO NAKATA

New York・WEATHERHILL. 1973 (図6)

【英文】

Since Chinese characters were introduced into Japan much later than the Chou and Ch'in periods, *tensho* never figured as a common script there. Probably the earliest record of *tensho* in Japan is the gold seal (Fig. 24) bestowed on the king of Kan-no-Wa-no-Na, a small independent region of northern Kyushu, by the Chinese emperor Kuang Wu in A.D. 57. It was discovered at the bottom of a stone chamber in Shikanoshima, Fukuoka

Prefecture, in 1784, and even then attracted the interest of many antiquarians. Detailed studies have been made of it and it has been often copied. The script style used for this seal resembles *byuten* or *moin*, Han-period *tensho* variants whose use is restricted to seals of the period. This gold seal should be regarded as having been made in China and, consequently, its existence is not evidence that *tehsho* was used in ancient Japan.

Seals from the Nara and Heian periods are numerous, and public seals range from the *Tenno Gyoji*, or Seal of the Interior (Fig. 46), and *Dajokan*, or Seal of the Exterior, to the various ministerial seals, and seals of the provinces, counties, villages, shrines, and temples. There were also clan and personal name seals for private use. These old seals are collectively called *Yamato koin* (Fig. 35) and are treasured by collectors. It appears that official seals were widely used in the Nara period, the custom having been introduced from the continent at the time the legal framework was established. The use of private seals, however, seems not to have been so widespread.

Properly speaking, *tensho* should be used on seals, and the style is usually the lesser seal script, *shoten*. There seem to have been people in Japan at the time who could write in the *shoten* style, but by the Heian period the use of *tensho* for seal inscriptions seems to have decreased in favor of *kaisho*. Presumably this was because the easy-to-write and easy-to-read *kaisho* script was more suited to Japan. Furthermore, because of the simplicity of style, these old *kaisho* seals are often prized by collectors.

【日文】

中田勇次郎著『日本の美術 別巻書』（平凡社、1967・5）

篆書の伝来

漢委奴国王の金印 日本は中国よりも歴史が浅いので、篆書が通行の文字となっていた周秦時代とはかかわりがない。わが国において篆書の資料としてもっとも古いと思われるものは、「漢委奴国王^{かんのわのなのこくおう}」の金印であろう。これは一七八四年（天明2）二月、福岡県の志賀島^{しかのしま}において石櫛^{せつかく}の下から発見されたもので、すでにその当時において多くの好古の人びとの注目の的となり、詳細に研究されまた実際に模刻されている。この印章にもちいられている書体は繆篆および摹印^{もいん}のたぐいで、漢印に限ってもちいられる漢篆の体であり、かつまたこれは中国で作られたと見るべき資料であって、わが国の古代にこのような文字が書かれ、また行なわれていたという証拠にはならない。

大和古印 奈良および平安時代にのこされている、もう一つの篆書の例は古印である。この時代の古印には天皇御璽^{ぎょじ}の内印をはじめとして、太政官印^{だじょうかん}などの外印、諸司印、諸国印、郡印、郷印や社寺印などの公印および家印、名印などの私印におよぶまで多数のものが伝えられ、大和古印などと呼ばれて好事家の間に賞玩されている。これは奈良時代において律令政治の成立とともに大陸の印章の制度が移し入れられたもので、官印が多くもちいられ、私印はまだそれほど広くは行なわれていなかったようである。

印章の文字は正式には篆書をもちい、その書体は小篆を主としている。わが国においても当時このような小篆の印文を書くことのできるものがあつたのであろう。平安時代になると印章に篆書体の印文をもちいるものは少なくなり、楷書体のものが増加しているようである。日本では日本に適した書きやすく読みやすい楷書の印章が行なわれたのであろう。しかも、この楷書には素朴な風味があり、後世日本の古印を好む人たちの賞玩の対象となっているものが多い。要するに奈良時代に起こつた篆書の印章は十分な成育を見ないままに平安時代を經過し、鎌倉時代になつて、ようやく中国の宋元の篆刻の風が移されたが、江戸時代に黄檗^{おうぼく}の禅僧や長崎の帰化人たちによって、今日のいわゆる篆刻が起こつてきてから、初めて日本の篆刻が成立するようになったのである。

本著は、中田勇次郎著『日本の美術 別巻書』（平凡社 1967年、新装版1979年）を英訳したものである。篆刻に関する箇所の日文と英文を掲載する⁴。

日本語の書道の専門書が適切な英訳がなされているか、同書を通してそれを確認・検証してみたい。

英訳をみると、例えば、「書体」の専門用語の英訳「The script style」は誤りといえないが、いくらか無理がある。この専門用語は、書のスタイル・体勢・様々な書き方、つまり漢字の書の一定の文字体系のもとにある文字の事をいう。つまり、書道としての専門用語の内容が、より具体的に反映させることが重要である。

また、「繆篆」・「摹印」・「大和古印」などのように、ローマ字での表記の用語も多く、詳細な注釈を施したものであつたらと思う。やはり篆刻に関する専門用語は、書道、願わくば篆刻の専門家との議論・意見交換が望まれよう。

5. おわりに

日本の書や篆刻の海外への紹介は、まだこれからといえよう。それだけに書や篆刻を専門とする人達の語学力の育成は急務である。

本研究から、篆刻に関する専門用語の翻訳は、辞典により翻訳がいくらか相違していることが分った。どの訳を採用するかは筆者の論文内容によるものであろう。それだけに訳者の力量が問われることになる。辞書を引いてそのまま単語を置き換えて終わりというわけではない。正確でこなれた日本語に訳すことが求められよう。

また、翻訳する場合、書道や篆刻の専門家と協議し、より適正な翻訳をしていく必要がある。その際における問題点を列挙して纏めとしたい。

- ① 日本語の理解力。
- ② 日本語と英語の高い文章力、幅広い語彙と豊かな表現力。
- ③ 高度の専門知識と専門用語を駆使できる能力。
- ④ 文体をできるだけ簡潔にした、内容が把握しやすい翻訳。

【註】

1) 日本の書や篆刻の海外への紹介は、まだそれほど多くない。

比田井南谷(1912-1999)は、本名は漸、神奈川県出身で、比田井天来と小琴の次男として生まれ、天来没後は書道研究機関「書学院」を継承し、碑帖の管理や出版に力を注いだ。南谷本人がすぐれた作家であり、海外のアーティストと交流を持ち、プリンストン大学・オックスフォード大学など大学で講演をするなど、本格的に海外に書を紹介した。書学院長・毎日書道展名誉会員・書宗院顧問・独立書入団客員などを歴任した。

小野寺啓治(1936-2015)は、『書道ジャーナル』を主催し、書を美術の面からの啓蒙をはかるとともに、積極的に海外に紹介した。美術評論家・書画家、『文字の意匠』(東京美術、1975・6)など著作も多い。

杭迫緑舟著『書道入門—Brush writing』(講談社インターナショナル、1988・1)は、外国人に紹介された同類の著作の中でも版を重ねた良書といえる。

2) 『季刊篆刻』は、日本篆刻社編輯になる、篆刻の専門雑誌。

東京堂出版。毎号テーマによる特輯がなされており、雑誌の前半は2色刷の印影図版、後半は解説や論文を掲載する。印史・印式・印制・印人・印譜などについて解説されている。

3) 『英文日本大事典—カラーペディア/Japan: An Illustrated Encyclopedia』。

日本の事柄が英語でわかる大事典。フルカラー写真・図版4,000点、12,000項目を収める。

4) 中田勇次郎(1905-1998)の著作で英訳された書道史に《Chinese Calligraphy (A History of the art of China) Hardcover - October 1, 1983 by Yujiro Nakata (Editor)》がある。

【補記】

芸術新聞社から次の著書が刊行予定である。紹介しておきたい。出頭 茂著『和英書道用語・用例集』(2018年2月)

(じんの・ゆうじ 熊本大学教育学部教授)

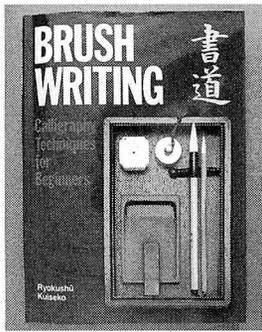


図1 杭迫緑舟 著
『書道入門 BRUSH WRITING』
(講談社インターナショナル株式会社、
1988・5)



図2 『イタリアへ行く書』
(小野寺啓治 企画、書道ジャーナル
海外文化事業団 発行、1986・12)

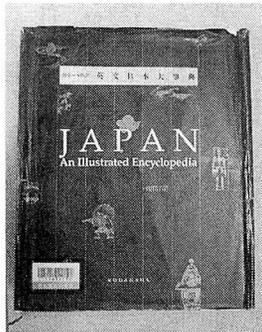


図3 『英文日本大事典—カラーペディア /
Japan: An Illustrated Encyclopedia』
(講談社、1993・11)

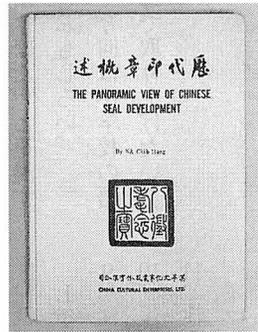


図4 NA Chih-liang 『THE PANORAMIC VIEW OF
CHINESE SEAL DEVELOPMENT』
(CHINA CULTURAL ENTERPRISES,
LTD. 1972・5) (那志良 編『歴代印章概述』
漢華文化事業公司、1972・5)

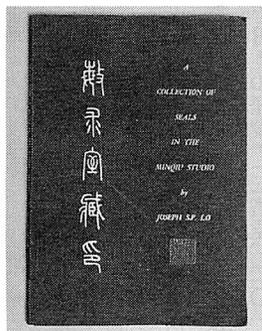


図5 Joseph S. P. Lo 『A COLLECTION OF
SEALS IN THE MINQIU STUDIO』
羅善保 編『敏求室藏印』
(薰風堂筆墨有限公司出版部) (1994・2)

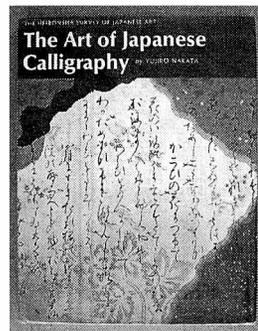


図6 YUJIRO NAKATA
『The Art of Japanese Calligraphy』
(1973. WEATHERHILL)